

チェンマイ大学での貢献 (80)

伊藤信孝

チェンマイ大学客員教授・工学部

本報では大学での生活やイベント参加において注意しなければならない事例（写真撮影と情報アップロード）を紹介する。大学の教職員および既に定年を迎え退職をしたいいわゆるOBなどが自由意思で参加するイベントがある。日本語で敢えて言うと老人会などという表現になるが英語ではシニア・クラブ (Senior Club) としゃれた表現になる。しかし参加者の年齢は必ずしも退職者ばかりではなく、現職のスタッフも参加する。彼らは主に参加者の世話役的役割を担っていると言う方が適切かも知れない。事業実施は年間1～2回ほどであるが、その時のイベント企画、参加人数により取りやめになったりすることもある。通常1回の参加に約2,000 THB（タイバーツ、1バーツは日本円で約3円～3.5円）であるから、日本円で6,000円から7,000円である。それで2泊3日で目的地を訪問あるいは遊覧し、立派なホテルに宿泊できる。ここで立派なホテルと書いたが、一般にタイのホテルは1部屋にベッドが2つありツイン・ルームが標準と言えよう。部屋の中は広々としている。日本のビジネスホテルはその比ではない。広々とした室内はゆったりとくつろげる広さであり、基本的に2本のプラスチック・ボトルに入った水が用意されている。この2本は無料である。冷蔵庫、クーラー、ポット（湯沸かし器）シャワー、トイレ、またホテルにもよるがガウン、スリッパなどが用意されている。日本のビジネスホテルとほぼ同じ値段でその数倍の広さを満喫できるところが大きな差である。いわゆる値段の割に得られる代価の割が大きいというのが実感である。ラオス、カンボディアでは部屋の広さがタイに比べいくらか小さいか、あるいは同じ広さの場合は料金が高く、いずれにしても支払った料金に対して得られるサービス、代価が低いということになろう。もちろん平均的な宿泊料金は1泊1,300から1,500バーツで、もちろん朝食付きである。ここでは最も標準的なホテルの場合を対象に書いているが、さらに安いレベルのホテルもある。それでも部屋の広さは日本のビジネスホテルの比ではない。流石に素泊まりレベルになると朝食は別料金となる。ちなみにこのレベルでは1泊400バーツ（日本円で1200円から1400円）程度である。少し話題はそれるがタイの大学には大学の宿泊施設が殆どの場合完備している。普通一般のホテルと殆ど変わりはない。宿泊料金もいろいろと選択でき極めて便利である。またセミナー (Seminar) やワークショップ (Workshop)、国際会議 (International Conference) などの企画実施が可能で、これだけでも日本の大学は国際交流事業で既に負けている。町なかから遠く離れた山の中に突然創立された大学でも立派な宿泊施設が併設されている。誰がホテルをそんなに利用するのかと部外者は怪訝に思うところがあるかといぶかるのも不思議でないが、町なかのホテルまでの距離を考えればやはり大学のキャンパス、もしくはその近くに宿泊施設がある事の意味は容易に理解で

きる。しかし頻繁な顧客利用が無ければホテルとしての経営が成り立たない。業者と相談し、かなりの頻度でのイベント開催実施を心がけているようである。一方日本の大学では学部によっては同窓会による寄付金などで新しく宿泊施設を設ける例もあるが、やはりビジネスホテル並の狭さである。言うまでも無くホテルは昼間は顧客は外に出ていて部屋を利用しないから、それで良いと言う考えもある、しかし余りの狭さに身動きが取れないのも事実である。職業柄最近では筆者のような大学人ならずとも部屋の中に装備される設備としてはインターネット (Internet)、小さくともラップトップ・コンピュータ (Lap top computer) および周辺機器、携帯電話、関係書類などを2次元的に配置できる空間ぐらいは欲しいものであるが、残念ながらそうした事が考慮されているビジネスホテルは極めて少ない。部屋の中を移動するにも持ち込んだ荷物をかき分けて、抜き足差し足で移動しなければならない。下手をするとつまづいたり、置いてある鞆に足をぶつかけたり、悪戦苦闘も為なければならない。物価の安さに加え、得られる代価の大きさから「本当の豊かさとはこのような事を言うのか」とその差の大きさを実感する。

さて話題を本論にもどす。その時の企画によってグループ・ツアー (Group Tour) の内容も異なるが多岐にわたる。タイの歴史的な名所、有名な寺院巡り、あるいはダムや建築構造物の視察を兼ねた巨大人工物めぐりなどが相当する。教員であろうと職員であろうとこの事業に参加している時は、身分や地位、ポストには余り関係が無い。気楽に話をする関係になる事でより友好と相互信頼を育む。そう言うことで、あまり気にもせずその趣旨に沿った行動を取っていたが、あるときたまたま2、3人の仲間の間で話をしているところに遭遇し、写真を撮った。その行為はそれほど非難される事でもなければ悪いことでもないと思っていたが、その後年輩のある教員から注意をうけた。集合写真ならともかく個人または少数の者の集まりではあまり写真を撮らない方が良いと言う事である。特に未だ学部長とかそれと同等またはそれ以上の現職にある人達が話をしている場合には特に注意をすべきと言うのである。その意味は彼らの上司にあたる人々が彼らなりに「彼は私の味方だ」と思っていたのに、偶然にもそうした写真が上司の目に触れ「奴は私と不仲のライバルまたは政敵に相当する人間と裏で通じている」との誤解を招きかねないと言う忠告である。

「なるほど」と納得し自らの思慮のなさを恥じた。さらに忠告をしてくれたその人の偉さは、そうした忠告が自分の事ではなく、現職にある人にとって不利に働く事への懸念表示であったことである。まさに「ずばり正論」であり、他人への配慮の深さにあらためて認識を新たにしたい。これこそ組織の管理運営者が持つべき重要な心得であることを学んだ。確かに肝に命じて、こころすべき重要な事である。管理運営を志す者にとって特に重要な項目の一つである。年齢差における高齢者への尊敬 (Seniority) への念もさることながら、こうしたイベントから貴重なことを学ぶ事が出来る利点の一つでもある。

筆者が自ら進んで積極的にフェイス・ブック (Facebook) や、ユーチューブ (Youtube) あるいはSNS (Social Network System) に写真をアップロード (Upload) することは避けてきた理由の一つは、情報は一度アップロードすると瞬く間に世界中に拡がり、消すこと

は難しくなる。消してもそれまでに拡散した情報は誰が何処でどのようにコピーしているかどうかは分からないし、知る方法もない。慌てて消しても完全に消えることはないと考えるのが常識である。すんでの所で不必要に、関係ない人に迷惑を掛けるようなことを避けることができた。この事を聴いて筆者は即座に撮影した写真を消し、忠告をしてくれたその人に「申し訳し無かったです。貴重な忠告を頂き有り難うございました。でも安心してください、写真は既に消しました」と報告した。そのひとも心から安心した様子が顔の表情から伺い知ることができた。いささか例えは異なるが、自分を含め相互に知り合っている外国人2人が自分も入れて2人で話をしていと言葉が十分に分からないから、ひょっとしたら2人で自分の事を話しているのではないかと疑いの眼で感じることもある。こうした事は筆者のみが経験していることではなく、誰しも少なからず経験しているのではないか。日本からの知人の来客とタイの教員の前で独占的に日本語で話をし続けると、居合わせたタイ人はどの様に感じるか想像してみれば分かる。筆者はこのような場合、予め「申し分ないが、この人としばし日本語で話をするが良いですか」と断ってから話をするときのことを思い出した。「そうだ、このときの対応と同じだ」と思いだし「何だそうなんだ」とあらためて納得した次第である。ましてや現職の要職にあるVIPと誰かが2人もしくは3人で話をしている場面の写真を撮り、意図的でなくとも何かの拍子にそれがメディアを通じて拡散されると、予期せぬ「もめ事」や、不必要な疑惑を生む原因にも成りかねない。日頃から十分な注意を心がけるに越したことはない。自分のみならず、他人をも巻き込み、加えて良好な人間関係すら壊すような結果にならないよう心がける事に絶えず留意する姿勢を持つべきであろう。考えてみれば、その人が与えてくれた助言は「筆者自身も平素からレベルの差はあるが心得ていたのではないか」と分かったがちょっと甘かったのではないかと反省の方が多い。

筆者はこれまでの人生で「人とのつきあいを常に銭湯に入った気持ち」を堅持することを自分に言い聞かせてきた。すなわち風呂には入っている時は全員が一糸まとわず裸であり、身分も職業も分からない。おなじ人間として「最小限の基本的平等」を持っていると考える事が出来る。すなわち金も、権力も、身分も、職業も風呂の中では殆ど無力であり、無意味で必要もない。そうした「人間としての最小限の基本的条件」のみで話し合える事が必要と考えそれを理想としてきた。上記のアドバイスはこの認識をややもすると忘れかけていたのではないかと、思い出させる瞬間でもあり、好機でもあったのではないかと感謝している。

以下の写真はシニア・クラブで企画のグループ・ツアーに参加した時の写真で、プレー(Phrae)、ナン(Nan)地域の寺院と田園風景を示す。年々寺院の建設は積極的な信仰心に支えられて増えつつあり、人々の寄付金でまかなわれていることがわかる。チェンマイのステップ山の頂上にある寺院も10年前はそれほどでもなかったが、いまや多くの建築物が隙間を埋め、ケーブルカーも設置されている。ただ、寺院参拝に出かけるときは雨が降る雨天の日は避けた方が良い。訪問してもタイル張りの床は雨で濡れており、滑りやすい。

余程注意をしていなければ思わず滑って転倒することになる。かなりの注意をしても滑って転倒した経験がある。また靴下をはいていた方が良いのか、あるいは裸足の方が良いのかの判断も難しい。滑るか滑らないかはケース・バイ・ケースで、運も左右するので最新の注意が必要である。滑らない工夫を参拝者に求めるのではなく、寺院側が工夫することが参拝者の数を増やし、信仰心の高い信者育成、観光産業の振興にも貢献するのではないかと考える次第である。

以下の写真は、まさに収穫時期を迎えようと頭を垂れる稲（左端上）とシニア・クラブ団体が2泊3日の予定でプレー、ナン地方の寺院巡りで尋ねた寺院群を示す。何処に行ってもタイの人々の神仏に対する信仰心の厚さを感じ取る事が出来る。

